



この「NEWSLETTER」は、研究の進捗状況、「フレッシュせんせい教師力アップ教室」の案内や報告など、研究課の諸活動を紹介するものです。



よろしくお願ひします

# 第1回 フレッシュせんせい教師力アップ教室

5月13日(金)に「第1回フレッシュせんせい教師力アップ教室」を開催しました。小学校、中学校、総合支援学校から約40名の先生方の参加があり、子どもたちを笑顔にするために、学習が楽しいと思ってくれるためにどうすればよいのか、いろいろな角度から話し合う姿が見られました。フレッシュせんせい教師力アップ教室は、日頃の悩みや困りを出し合って、解決策を考える中で互いに学び合い、高め合うことを目指した研修です。今回は、1回目の研修の様子を紹介します!!

## アイスブレイク



お題「フレッシュ」って何!?

研修の初めに、学級の仲間づくりや学習のヒントとして、「連想クイズ」を体験してもらいました。初対面の仲間でも積極的に話し合い、緊張がほぐれた様子でした。

## 一人学び



GIGA 端末を使って、悩みや困りを共有するグループ交流に生かしました。

## グループ交流



子どもに合わせた適切な学習支援ってどうすれば...

困りや悩みを出し合い、それぞれの実践を通じた解決策を話し合いました。

## まとめ



この実践は月曜日からやってみよう!!

学んだことを振り返り、明日以降の実践に生かしていくことを考えました。

## 参加者のみなさんからの感想

- ・私は日々働く中で、何かしないと、何とかしないと、という焦りをもつことが多かったが、それはほかの先生も同じだということを知ることができたのは、安心につながった。
- ・同グループ内の様々な意見を聞き、自分が見落としていた着眼点に気づくことができ、今までよりも違った角度で自身の学校内での取組を振り返ることができました。
- ・いろいろな考え方を共有できたことで、自分自身が実際に行っていること以外のことも試すべきだなと感じました。一つの考え方に凝り固まるのではなく、様々な視点でチャレンジしていくことの必要性を感じました。
- ・相談や共有は大切であることも改めて感じさせられた。悩みや迷いを相談することによって開ける道や解決方法があることを今回すごく感じたので、明日からは今以上に共有してチーム学校の一員として活躍していきたいと思いました。



## 第2回 フレッシュせんせい教師力アップ教室

日時 9月9日(金) 18時30分~20時 ※変更になる場合があります。  
 対象 (小・中・総) 任用1~3年目講師 ※定員 60名  
 内容 日頃の教育実践についての困りや悩みを共有し、その解決に向けた手立てについてグループのメンバーと意見交流をします。

第1回 5/13(金)

悩みや困りなどグループで話し合い、明日から取り組もうと思えることについて考える。

各自実践

第2回 9/9(金)

自分の実践を振り返り、授業改善や学級経営など、明日から取り組もうと思うことについて考える。

各自実践

第3回 1/23(月)

1年の実践経験をもとにテーマについて意見を交流し、授業の在り方や生徒指導など様々な視点で考える。

年度途中からもご参加いただけます。

## 悩みや困り解決のヒントに!! 研究課の研究実践 WEB 発信

各研究員の成果物等を発信しています。今回、研修の中で出てきた悩みや困りを解決する授業づくりのヒントが、研究課の研究実践にあります。興味関心のある方は是非ご覧ください。



京都市総合教育センター



## 日常的な OJT の活性化

～教職員一人一人の資質・指導力と  
学校の組織力の向上を目指して～  
研究員：大上 由加里

OJT(On-the-Job-Training)と聞いて、どのようなことをイメージされますか。「仕事を教えること」「若手を育てるための研修」などでしょうか。中には、「聞いたことはあるけれど、よく知らない」という方もいらっしゃるかもしれません。京都市で進める OJT とは、「教職員同士が協働する機会や場面(学年会、教科会、分掌業務など)をはじめ校内研究・研修、若手・中堅教員実践道場など、学校教育目標の実現に向けた日々の教育活動を通じた**管理職・同僚教職員間での『学び高め合う』取組**」(1)のことを言います。

研修会や学年会などは、多くの学校で定期的に行われていると思います。しかし、「日頃から教職員間で話し合おうとする雰囲気がない」「相談したいけれど、時間が取れない」「全体で共通理解を図ることが難しい」「一部の教職員だけが熱心に取り組んでいて、温度差を感じる」などということもあるようです。

では、忙しい毎日の中で、どのようにすれば組織として効果的に OJT を進め、教職員同士が互いに学び高め合うことができるのでしょうか。そのために、どのようなことが必要なのでしょう。

本研究では、アンケートや実地調査を通して、OJT がうまく機能する要素や方法を探り、取り組みやすい形にまとめて発信したいと考えています。まず1年次、既に各校で取り組まれていることを、ぜひ教えていただきたいです。

(1)京都市教育委員会『京都市 OJT 実践ガイドライン』平成 29 年 5 月



## 家庭学習と授業の相互で目指す学習を 自己調整する力の育成

～認知的方略の往還に着目して～  
研究員：久保田 守

学習を自己調整するためには**動機づけ、学習方略、メタ認知**の三つの要素を備えることが必要です。1年目の研究実践では、この三つの要素を備えることで家庭での学習を自己調整することができる生徒の育成を目指しました。2年目となる本年度は、実践を各教科等の授業の場面にも広げ、より効果的に生徒の自己調整する力を育成していきます。以下がその手立てです。

- ① 指導者によって生徒が学習方略を選択する機会を、授業の中に設定する
- ② 授業で選択した学習方略を理由とともに記録し、方略を振り返る
- ③ 家庭学習と授業の場面間で往還させながら学習方略を活用する

実践では、授業の中に探究的な学習課題を設定し、課題の解決に向かうために必要となる**認知的方略**(学習内容を分類・整理することや今までの学習内容と関連付けること等)を生徒に自己選択させていきます。認知的方略を選択するためにはメタ認知を働かせることが必要となります。そして、学習の成果を実感することができれば動機づけを高めることにもつながります。

選択した認知的方略は理由とともに記録し、振り返りを行っていきます。理由を記録することで、生徒が過去の経験を生かして自己調整している様子や生徒の意思的な側面を指導者は見取ることができるようになります。

また、動機づけ、学習方略、メタ認知の三つの要素は場面に限定されない汎用的なものです。認知的方略を軸として、生徒がこの三つの要素を自覚的に往還させながら発揮することができれば、生徒は自己調整する力を様々な分野で発揮することができるようになりますと考えられます。

## 「読み解く力の育成」 ～理科を通じた読み解く力の育成に視点をおいた授業提案～ 研究員：中村 寿樹(小) 中村 洋平(中)

児童生徒を指導していて「授業中にはよくできていたのに、テストの結果がとまわらない」というギャップを感じたことはないでしょうか。もしかしたら、その子は問題文の意味や教科書等のテキストを正確に理解して読めていないのかもしれませんが。全国学力・学習状況調査の結果の分析などにおいて、「テキストから必要な情報を正しく取り出す」「多様なテキストを的確に読み取る」ことが課題だと言われています。一人一人の児童生徒が教科書などの内容を確実に読み解き「一人学び」に取り組めるようにすることで、「自ら学ぶ力」を高めたり、協働的な学びの場面でのやりとりをより教科の目標につなげたりできるのではないかと考えています。

本研究では、小学校・中学校での**理科の学習内容のつながり**を意識した中で、理科の授業展開に、「読み解く力」を高める視点を取り入れた授業の提案を目指します。そして、理科の授業で得られた有効な改善策を活用し、次年度は他教科へと実践を広げていきたいと考えています。



### ＜小学校＞児童が「読み解く」ことを実感できる授業

児童生徒が、教科書等のテキストを的確に読み取れない要因として、抽象的な語彙・表現があり、それらを自分事として、具体的なものと結び付けて考えることが難しいことが挙げられます。そこで、抽象的な表現を具体例や既存の知識と結び付けながら、「**考えながら読む**」場面を継続的に設定することで、「読み解く力」が高まるのではないかと考えています。

小学校理科では、理科の教科の目標である「問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を育成」する授業の中に、「読み解く力を高める視点」を取り入れた授業デザインの提案を考えています。ただ「読みましょう」と読む活動を行うのではなく、「考えながら読む」方法を知り、児童が「読み方」を実践していくことで、「こうやったら読めた!!わかった!!」ということを実感できるようにしていきたいと考えています。



### ＜中学校＞生徒自ら資料を活用して課題解決する授業

「蒸留で集めたエタノールを多く含む液体を、もう一度蒸留すると、より純粋に近いエタノールが得られる。」

これは、中学1年の理科の教科書の一文です。「多く含む」や「～に近い」のように、日常会話で用いることが少ない言葉が、教科書の所々に見られます。これは中学レベルで「正確に」事象を説明すると、このように表現せざるを得ないためですが、生徒からすれば難解だと思われます。

先生の解説で生徒は理解するでしょう。しかし、そこを「生徒自身の力で文章を読み解き、理解する」授業を設計し、自ら学び、課題を解決できる力を育みたいと考えています。図表も読み解き方が解ってこそ、理解を助ける資料になります。自分で解釈し、他人に伝え、指摘を受けて正確な表現にする。このような活動を継続的に実施し、読み解く視点を身に付け、あらゆる場面で活用できる力の向上を図ります。

## 算数科・数学科における 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の在り方を求めて ～課題を選択し自立的に学び合う授業の提案～ 研究員：梶村 契(小) 寺井 淳(中)

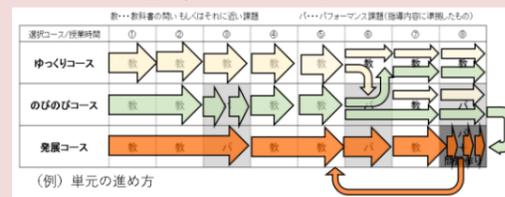
複雑化する社会の中を子どもたちが生き抜き、よりよい社会や人生を創り上げていくために教育課程全般を通して、自立した学習者へと育てていくことが大切です。今までの教育の良さを生かしつつ、より子どもたちが主体的に対話的に学びを深めることのできる「**個別最適な学び**」と「**協働的な学び**」となる授業が求められています。昨年度の研究では、一人一人の学習進度に応じて学習活動を自己選択できる授業デザイン(算数科)や、ICT 機器を活用し自分と他者の考えや、既習の知識を関連付け、統合的・発展的に考えていく授業(数学科)を提案しました。一斉に時間で区切られることなく自分に合ったペースと学習方法で学び進められることによって、子どもたちの学習意欲が高まり、友だちとの協働的な学びによって様々な視点から考えを深めることができました。個別最適な学びと協働的な学びには、子どもたち自身で**学習を自己選択**できることや、**考えを共有し合う場**があることが大切だということです。

こうした知見に基づき、本年度は学習活動を自己選択できる機会や、考えを共有する場を提供することに加え、学習課題も自分に合ったものを選択できる「**個別最適な学び**」と「**協働的な学び**」となる授業を、算数科と数学科で提案していきたいと思っています。



### ＜小学校＞単元を通して課題を選択できる授業

小学校算数科では、どの課題に取り組み、どのように学習していくのか単元全体の**学習計画を個人で立て**、自分に合ったペースで学び進めていく授業を提案します。算数が得意な子どもやゆっくりならできる子どもなど、学級には様々な子どもたちが在籍しています。スモールステップを踏んでいく課題や、本単元で学習したことを生かす必要のある発展的な課題(パフォーマンス課題等)も選択できることによって、一人一人の資質・能力を高めることができると考えています。



### ＜中学校＞生徒が学習活動を選択できる授業

多くの指導者は、授業の中で学習課題を解決する場面で、生徒が解決できる時間を想定し、個人思考により自力解決をする時間と、グループ学びなどにより集団解決をする時間を設定していると思います。しかし、自力解決の時間では課題解決に至らない生徒の中には、「もう少し時間があつたら解けるのに」「わからない部分だけ誰かに聞いて考えたい」と思っている生徒もいるかもしれません。そこで、学習活動の時間、形態、方法などを**生徒が選択**することで、一人一人の学びが深まるのではないかと考えています。生徒が学習活動や学習課題を**自己選択、自己決定**して自立的・協働的に学習を進めることができるようにしたいと考えています。

